

まえがき

江戸期の武士の理想とした人間像は、元龜・天正の動乱の世に、馬上颯爽と槍をふるつて戦場を疾駆した戦国武将でした。彼らは不撓不屈の烈々たる土魂をもつて、乾坤一擲の勝負を力の限りに戦い、ある者は勝者となつて一国一城の主となり、ある者は敗者となつて戦場の土に帰しましたが、勝敗はまさしく時の運であり、彼らは例外なく合戦の勝ち負けよりも、戦場で存分に悔いなく戦うことを最大の喜びとし、至高の誉れとしました。江戸期の武士は戦国武将のこの純粹にして爽快な身の処し方に憧れたのです。

古来、武士たる者は世に美しく生き、美しく死なねばならぬとされていきますが、戦国武将たちの願いは「綺羅を飾る」という言葉に象徴されます。綺羅とは綺羅星という言葉もあるように、美しいとかあでやかという意味ですが、戦国武将はこの言葉を見た目のよさという外形的なことばかりでなく、内面的な心映えのよさにも適用しました。心に綺羅を飾るといのがそれです。

戦国時代は弱肉強食の下克上の乱世でしたが、逆にそういう酷烈な世であればこそ、戦場を疾駆する武将には、五月の風が吹き抜けるような涼やかな心映えが求められたのです。たとえば、大坂夏の陣で壮烈な最期を遂げた西軍の真田幸村や木村重成が反

徳川の武将でありながら、江戸期の武士に深く敬仰されたのも、その涼やかな心映えゆえなのです。

武士とはその本質を煎じつめれば精神の美であり、武士道とは思想というよりも倫理というよりも、明らかに美学であるといえます。その美学を生死を賭けた戦場でひたすらに実践したのが戦国武将であり、綺羅を飾るとはこの美学の実践に他ならなかったのです。たとえば、「名こそ惜しけれ」とか「恥を知る」あるいは「げに潔し」といった戦国武将の心映えを象徴する言葉も、心に綺羅を飾るということを前提としており、この爽快な前提があるゆえに、江戸期の武士を魅了して止まなかった凛冽にして清冽な戦国ロマンというものが自ずと生まれたのです。

戦国時代というのは日本史上で稀有の英雄時代であり、この壮烈にして壮大な英雄時代を持たなければ、日本史はロマンの香気の薄い歴史となっていたことでしょう。そしてこの英雄時代を支えた最大の要因が、心に綺羅を飾るといふ一点に自らの全存在を賭けた戦国武将の美学にあったのです。

本書には、戦国武将の凄絶な生きざま死にざまを活写したとして定評の『甲陽軍鑑』『武将感状記』『常山紀談』『名将言行録』等より、これぞ戦国武士道といった至言・名言を厳選して掲載しました。いずれも命の言葉というにふさわしい迫真の言葉といえます。

現代日本は混迷の時代といわれていますが、それは卑弱で過保護な考えが世の風潮の主流となっているためで、混迷という一点を捉えても、現代社会が戦国時代に比べれば物の数ではないことは誰でも理解できるでしょう。それを証明するように、本書には現代社会ではまず耳にすることのない、血を吐くような裂帛の気合がこもった言葉が頻出します。これらの言葉には、現代人が忘れかけようとしている男の美学とロマンが満ちあふれており、これらの言葉を心読すれば、不撓不屈の戦国武将の心映えの宜しさを感得できるはずです。

そしてさらに深く戦国武将の烈々たる士魂を我が物としたいと望むなら、音読をお勧めします。「読書百遍、意自から通ず」という教えもあり、戦国武将の命の言葉の数々を声に出して読めば、彼らが命を賭けて追い求めた「心に綺羅を飾る」ということの真意を、より一層鮮烈に体得でき、それが必ずや、現代という不毛の時代を生きねばならぬ読者各位の明日を生き抜く強力な心の糧となるに違いありません。

北影雄幸